

# Urban Design Lab. Magazine

2015.01.28 vol. 225



## プロジェクトの知の共有

IDENTIFYING OF PROJECT'S KNOWLEDGE

佐原 PJ × 三国 PJ 座談会開催! p.2  
「都心に住む」を考えるには  
神田 PJ 1 年目の挑戦 p.6

東京大学  
工学部都市工学科 /  
工学系研究科都市工学専攻  
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：高梨 遼太郎  
編集委員：道喜 開視 原由希子 今川 高嶺  
柄澤 薫冬 柴田 純花 高橋 舜  
中島健太郎 益邑 明伸

プロジェクトの知の共有

三国 × 佐原



# 佐原PJ × 三国PJ 座談会開催！

歴史的空間の再編を考える

A Talk by Mikuni & Sawara Project Members! For Restructuring Historic Space

普段はなかなか互いの活動内容を知る機会が無いプロジェクト同士。今回は佐原プロジェクトと三国プロジェクトのメンバー達がそれぞれの活動成果や課題を共有するべく座談会を開催しました。空家の改修や歴史的空間の再編等共通するテーマが多い2つのプロジェクト。今回は両プロジェクトのM1メンバーである今川・柄澤・高橋・滝澤・森川・李の6人が熱く語り合いました。  
(編集：M1 高橋)

\*

## 一今の課題 (佐原PJ)

**李**：今はさわらぼ(高校生と共にいる空家活用)の持続性が1番かな。あと佐原の問題としては、色々な団体があるが、高齢者中心の組織で新陳代謝が起こっていない問題がある。  
**森川**：団体っていうのは？  
**李**：まちづくり団体のこと。考える会や商工会議所等いろいろな団体がある。  
**今川**：考える会はまちなみの方をずっとやってきた組織。今は硬直化していて、新しいことをしていないように見えてしまう。これからまちづくりを担っていくのが誰なんだということが言えなくなりつつある。それぞれが独立して動いていて協働していない。  
**柄澤**：今言っていた団体がばらばらしているというのと、さわらぼが無くなってしまおうという2つの問題が挙げられたが、つなげていきたい？  
**今川**：つなげていこうとはしている。ちゃんと進められていないが、佐原の担い手として若い人を育てなければいけないというのがあり、それで小学生や高校生にアプローチしようみたいな意見もあって、いまさわらぼで担い手というかまちづくりに繋がる人材がどう生まれうるのかを今整理しようとしている。そういう意味でつなげたい。  
**柄澤**：それはできそう？言いは悪いが、今さわらぼが成功しているという風になっているのは、高校生に自由に使わせてあげている状況があるからというか。これから10年20年したときに帰ってくるかいうときにそれは別の問題。  
**今川**：現状さわらぼには色々な関わり

方がある。例えば部活動で写真を展示するような人は、それをまちづくりとは全然捉えていないが僕たちとしては普段まちなかにいなかったひとがまちなかにでるとということ自体に意味があると思っている。で、他に高校生のまちづくり団体である佐原高校まちづくりプロジェクトチーム(SMP)というのがあるが、今その人たちが高校の部活動がさわらぼで活動出来るように動いてくれている。そういう人たちが将来的にまちづくりや佐原のために何かしてくれる可能性はあると思う。

**柄澤**：間接的にまちに役に立つ関係ができるということか？  
**今川**：それを今議論している。  
**柄澤**：そうじゃない意見とは？  
**今川**：実際OBOGになって、さーっと(まちに)入っている人はまだいなくて無理ではないかという気もしている。  
**滝澤**：佐原高校の生徒は卒業してみんな東京などに行ってしまうので、関わろうとしても時間的な制約から難しいという面もある。ただ、高校生の中でもまちへの関わり方次第でまちに対する愛着は違うのかなと考えていて、その辺を詳細に分析したいと考えている。

## 一今の課題 (三国PJ)

**高橋**：今の問題点としては、先月空家の改修に向けた提案発表を行ったが、結局まちづくりに積極的でない人の理解を得られなかった。提案はそういう人たちを意識して作ったつもりだったが。それで、とりあえずやるしかないねということで話が進んでいるが、将来的にはそういう人たちも上手く取り込む方法が必要。  
**滝澤**：積極的でないというのは、まちづくりに対して積極的でないのか。  
**柄澤**：先ほど會所が空家を改修して講座を作った話をしたが、そこで夜遅くまでライブをやったりした。それとか會所の人は成功したと思っているが、隣の家の人からするとうるさくてしょうがない。それでまちづくりに対して懐疑的になってしまった。あと今年度は空家を2件改修予定だったが、新しく空家を見つけて来てそちらの改修を



▲設計した公園及び倉庫の模型

始めだしたので予算が足りなくなり、1軒の空家は現時点で保留になった。佐原は団体と言った時に群雄割拠状態だが、三国はそれが1つだけ。そこが明確な意志を持たずに猪突猛進している。  
**李**：會所は何人くらいいるの？  
**高橋**：セクションが色々あり全容があまりわからない。  
**李**：(會所は)NPO？  
**柄澤**：一般社団法人。  
**森川**：05年はNPO法人三国湊魅力づくりPJとなっている。會所の設立は2012年とのこと。  
**滝澤**：この人たちに頼まれてプロジェクトがはじまったということ？  
**柄澤**：頼まれて始まったが、頼まれたのかよくわからない状況にもなる。  
**滝澤**：なんか迷走して声かけただけみたいにも聞こえる。  
**森川**：その人たちと坂井市も意思疎通出来ていない。  
**柄澤**：坂井市はすごい協力的なんだけども。  
**森川**：そう。大学生が思うようにやってみたら良いよというスタンス。  
**柄澤**：話すと考え方もわかってくれる。公園の改修で入口に迎え入れるような東屋を挿入してまちなみの連続を保ちつつ奥まで入っていけるようなものを計画したんだけど、公園に立てる構造物は法律上2%以外の建坪率しかだめと決められており、僕らの計画した東屋では全然立てられない状況だった。だけど坂井市は提案を評価してくれて公園指定を解除すると言ってくれた。

今川：お金は全部會所が握っているの？

柄澤：基本的にそう。さっき言った森田銀行とか、岸名家の業務委託とかも會所はやっている。

滝澤：市と會所の間に軋轢みたいなものは生じていないのか。

柄澤：業務委託とかはちゃんとやっているし、まちを良くしようとして事業もちゃんとやっている。

森川：坂井市と三国會所が全然違った解釈をすとかってことはある。でもギスギスは全然していない。

### 一空家の改修について

李：今空家の提案を考えていると思うが、どんな人をターゲットにしているのか。

滝澤：例えば観光客に来てもらうための、住民に使ってもらいたいのか。



▲改修予定の空家「雲乃井」

森川：主には住民を考えている。三国は祭の小さい区毎に分かれている。いま一区切りついた倉庫の改修だが、そちらの方は下新区という区の住民の方に主に使って欲しいと考えていて、その生活が見えたりそこから外に出て行くようなものを考えた。観光客については、直接呼び込む訳ではないが結果的に観光客も来たくなるようになったらいいねという風にした。でも會所との打ち合わせを経て、最終的には観光でどう呼び込むかという話もストーリーに組み込んだ。

李：住民はどういう人が多い？

高橋：高齢者ばかり。

柄澤：年を取った時に暮らしやすいまちであるというのはアクティブシニア層にとって良いまちだと思う。なので高齢者が生きやすいまちってどうい

ものかを考えるのが1つある。もう1つは、若者をどうしようという話。若者には更に2パターンあって、20代で人口流出が激しいという話が佐原同様にある。それをどう食い止めるかっていうのを考えなければいけない。とはいっても産業もないので、1つの手として空家活用ははまっていると思う。で、若者のもう1つは3,40代の主婦層。福井県は共働きの世帯が日本で一番多く世帯収入が日本一。なので女の人が元気でまちを支えていく下地があると考えている。その人たちがどうまちに入っていくかはまだ見えていないが、例えば網目の教室とかその人が得意とすることをやらせようとか。お金は生み出さないけど人がでて来て交流するか。そういうアクティビティを生み出せたら良いのかも。

李：主婦層の人はどこで働いているの？

柄澤：実態はこれから調査していく予定。基本的に正規雇用についてはいいが、どこに勤めているかはわからない。

今川：細かいが共働きなら寧ろアクティブじゃないのでは？ 専業主婦が多いまちの方がまちづくりの担い手的な意味ではそうなり得る気がするんだけど、なぜ3,40代の主婦に目をつけたの？

柄澤：1こあると思うのは、女性が出産後再び働く際に、それが労働じゃなくてまちづくりに向くのはありがたと思っている。お金じゃなくて、物々交換もあるかもしれないけど、積極的に動くポテンシャルはある気がする。

今川：余裕がないから共働きしていると考えた時にお金じゃなくてできるのかなって気になった。

柄澤：今後、お金がどれだけ重要になるか分からない所がある。若者の仕事の選び方や価値観も全然変わって来ている。

### 一祭りの活かし方

高橋：三国には三国祭があってそれを提案にどう活かせるかということで一通り調査をした。佐原も大祭があり、祭りで調査をしていると思うが、その調査がどう提案に結びついているのか。

今川：祭りをどう提案に活かしているかというよりは、祭りでの調査をどう提案に活かすかやっている。

滝澤：祭りのときはその時しか出来な

い調査をやっている。佐原の最大限のポテンシャルが祭の時に発揮される。だから例えば路地を歩かせたいとか、路地に店を出したいとなると、お祭りの時に路地に人が流れてこなくては無理でしょうみたいな。逆に普段使われていないけど祭りの時に人が行くような路地には空間的なポテンシャルがあるのではないかと。

今川：基本的に祭りは調査のチャン



▲佐原「秋の大祭」での聞き取り調査の様子

スとしか見ていなかった。

柄澤：祭りのときに提案していないのはそうかもしれないが、祭りを使って日常の提案にどう反映しているのか。今は観光客目線の話で、地元の人目線で見たとお祭りって非日常だけど日常だと思う。それに対してさわらぼとかがどういう役割を持っているのか、例えば祭りと日常みたいな話をしたとの位置付け方みたいな。三国ではまだあまりわかっていないが。

今川：祭りの時に盛り上がる佐原じゃなくて祭りの時以外にどうするっていう目線で考えていたから祭りを活かした提案というのはなかった。

柄澤：そうするとこちらと一緒にだね。例えば突発的に思いついたが、10何区ある区が持ち回りでさわらぼで練習してくれたら、普段まちなか観光に来てくれた人が非日常を感じることが出来るかそういう絡め方もある。それによってさわらぼの存在と祭りの存在を同時に認識出来る。そうすると祭りとかさわらぼが繋がるし、そういうのもあるような気がする。

滝澤：今はそういうのはない。

今川：提案としてそういうものはいろいろな所から受けている。小学生の大





▲佐原PJの報告書

半が入る佐原郷土芸能部とか小学生の活動の場として最適だよみたいな議論はしている。けれど実際にアクションには至っていない。

**森川**：それは今までの先輩方が日常の人が大事でしょとみんなそういうふうを考えて来たからということ？

**今川**：祭りから見える佐原じゃない佐原を考えることの方が大事なんじゃないかなと思っている。祭り時の佐原は確立しているけど、それ以外は不十分。

**柄澤**：祭りの形成が、例えば日常でコミュニティとかに大事だったりするかもしれない。そうした時にどういう空間があるのかなと思った。日常が大事と言っている日常は祭りに繋がっている。日常として祭をどう捉えるかというのが何か無いかなと。三国もこないだの提案では祭りも大事と言いつつ、結局365分の1の祭りより日常を考える方が大事という流れになったが、でも祭りは大事。

**森川**：まず祭りを見ないと始まらないということで参加し、山車を曳いた。

**滝澤**：佐原＝祭りという凄く単純な図式が成立しているが、それだけだと広がらないだろう。祭りの時以外の佐原をどう魅力に感じてもらえるかを考えるのが大事だと思っている。

**今川**：あまり関係ないかもしれないが、祭りのための会議とかがあるがこれがけっこう村社会的になっている。考える会とか祭りの組織がピラミッド型の構造で、若い人から見るとその存在によって地元の人と関わると同時に押さえつけられているみたいな状況も課題として感じている。それを解決する何かというのは今のところ無い。

**柄澤**：(それは) 共通の課題。

#### 一後輩への引継ぎ方

**高橋**：佐原の話ではないかもしれないけど、下の学年の受け入れ体制というか。4月に佐原プロジェクトに入って、高梨さんなどから色々教わってきたと思う。僕らは4月に2年目になるが、どういう体制を用意して新M1を迎えるとその後の活動がスムーズに展開していくのか、というのが見えていない。自分たちがどう受け継いだか、あとここはこうしてほしいよ高梨さんというのがあれば。

**今川・李**：言わないよ、それは(笑)

**今川**：なんか教育された…？

**李**：まち歩きと一緒にいき、解説してもらった。そこからはいきなり高校生とのミーティングと一緒にいったりした。

**滝澤**：高校生とのミーティングに参加して、高梨さんと中野さんが喧嘩してるのを見たり。

**柄澤**：何か分からないけどひたすらミーティングに参加したという状況なのだとしたら、それはよかった？

**滝澤**：良い点も悪い点もあった。良い点は、具体的にどういう議論が交わされているか見て覚えられたこと。解説しても分からないことも多いと思う。他に良かった点は、いちいち解説するのに労力を使っていると、プロジェクトが前に進んでいかない。そうでもしないと引継ぎ期間が半年くらいになってしまう。

**今川**：基本的には、最初プロジェクトで集まった時に、報告書とかあるし勉強会などはやらないよ、と窪田先生がおっしゃっていた。各自で読みなさいと。

報告書読んだらだいたいわかる…ところもある、分からないところもある。**滝澤**：報告書はそういう意味ではすごく大事だと思う。

**柄澤**：高梨さんたちの代の報告書はその時なかったんだよね？それはどうやって引き継いだの？

**今川**：だから若干分かってなかった笑。5月くらいのミーティングで高梨さんと中野さんが根本から議論している場面があって、それを聞いて「ああそういう流れなのね」というのを理解した。

**李**：良かったと思うのは、担当分けして、同じ目線で見られたこと。割り振りもしてもらって、自分の責任が出てきた。

**柄澤**：なるほど、最初からお客様ではなかったのね。

**滝澤**：たぶん来年1個下の人たちで迷っている人たちをいかに自分たちのプロジェクトに引きこむのかということで、最初ががつつり囲い込んでしまうのがすごく大事なのだと思います。

**森川**：でも決まっている子は決まってそうだよ。迷っている人をいかに入れられるかだよ。

\*

2時間あまりの座談会では、白熱した議論が交わされ、互いのプロジェクトの活動について一層理解を深められたように思います。佐原と三国、場所は離れていますが、抱えている課題に共通の要素が見られたのが非常に印象的でした。

両PJの皆さん、どうもありがとうございました。■



# 「都心に住む」を考えるには 神田PJ 1年目の挑戦

What Did the Kanda Project Team Do to Study on Downtown Residence?

今年度から始まった新しいプロジェクトの一つに神田プロジェクトがあります。東京の中心でどんなことを目標とし、なにを思いながら、なにに取り組み、来年度に向けてなにをしようとしているのでしょうか。今回はあえてプロジェクトメンバーでない筆者が、メンバーに話を聞きながら神田プロジェクトを振り返ります。

(編集：M1 益邑)

## 神田PJの始まり

そもそも神田や千代田区は研究室と繋がり深い地域の一つ。その繋がりの一つが西村教授が理事長のNPO法人神田学会だ。また、プロジェクトメンバーの一人、M1羽野は卒業論文で「神田における老舗集積の立地要因と役割」というテーマに取り組み、その過程で神田学会とも接点を持っていた。神田に住む学生が複数いた

こと、本郷から近い等の好条件もあって、委託等の要請を受けない比較的自由なプロジェクトとして始まった。

年度当初のプロジェクトの概要を説明するプロジェクト報告会のスライドには目標として、「神田学会、地域等と連携しながら、神田らしさの実態・背景を明らかにし、その変容と将来の神田を考えていく」とある。「神田らしさとはなにか」の問いのもとに6人の学生が集まった。

## 神田らしさの難しさ

神田PJの最初の活動はガイダンスを兼ねた街歩き調査(4月)。窪田教授、中島助教及び学生7人で2時間ほどの調査だった。歩いて感じた素朴な疑問は「神田らしさって本当にあるのだろうか」だった。なぜなら神田と一口に言ってもその範囲は広く地域によって雰囲気違って、それ

ら一つにまとめるような空間的な「らしさ」が初見では見いだせなかったからだった。

そこで基礎調査(5月～6月)という名の、データによる地域の実態把握を行った。人口、世帯数の町丁目別の違いに始まり、建物や路地の分布、商店街、事業所、生活圏、地価、鉄道に至るまで地図上に表現していった。各データには解説として、見いだせる特徴を記した。窪田教授が「ぜひ他のプロジェクトでもやろうよ」と評価する出来だった。それをまとめていく過程で神田PJのテーマが話し合わせ、次第に「神田の都心居住を考える」という流れになっていった。

## 都心居住

「都心居住を考える」とはすなわち、都市の中心でいかに住み、働くかを考えることである。それを神田で考える意味とはな



### 基礎調査

4月に神田地区の人口、土地利用などの基礎情報を手分けしたまとめた資料。「そこから読み取れる意味をもっときちんと記述して欲しかった。」と辛口の中島助教。「でも分析の視点がないころだったから。今ならもっとできるはず。」



### 神田勉強会

小藤田正夫さんとの勉強会。毎回ゲストをお呼びして神田の歴史や戦後の神田の実態、これからの都市経営のあり方など、様々な切り口から神田について考えていく。



### 緑台

TATのワークショップとして、神田の街をリサーチし緑台をデザインした。大きさの異なる緑台は入れ子状にでき、向きを変えると立ち飲みに適した高さの机になる。「すっきりしていてかっこよく、実用的なデザイン。」と中島助教。





## 神田PJの1年

4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
キックオフ 街歩き調査	神田学会との 初顔合わせ	基礎調査まとめ 神田学ツアーに 有志で参加 小藤田さんのレク チャー、打合せ			緑台組立 WS	神田百年弁当試作	TAT 開催 老舗ツアー主催		
						第1回神田勉強会	第2回神田勉強会	第3回神田勉強会	

にか。中島助教に尋ねると、「そこがずっと東京だった場所だから」という答えが返ってきた。

「都心居住や生業とか産業というものはこの都市にも当たり前にある。大阪や名古屋や福岡にも、ニューヨークにもパリにも、シンガポールにも上海にもある。それが東京の場合にはどうなのか。東京を都市としての根本から考えるためには、都市に住む、働くということを江戸時代からずっとやってきたところで追いたい。今までの変化やこれからの未来はなにか、それをどう計画、デザインしてきたのだろう。2020年以降どうデザインするかに繋がっていくとい

### 神田勉強会

神田で都心居住を考える一つの方向性は、神田に蓄積された暮らしを掘り下げて

いくことだ。プロジェクトメンバーは6月に窪田教授の紹介で、小藤田正夫さんと知り合う。小藤田さんは千代田区の職員として働きながら江戸時代から現代までの、この地域の歴史を研究してきた。小藤田さんの現在の関心が「戦後の神田の衣食住」にあることもあって、ともに**神田勉強会（10月～）**をすることになった。大工や繊維業などを神田で営む方々をゲストに話を伺いながら、東大の調査の進捗も共有する。神田の個々の産業を構成する多様な職のネットワークやメカニズムを明らかにしようとしている。

### TRANS ARTS TOKYO 2014

もう一つの方向性は、現在の神田に目を向けることだであろう。昨秋、神田エリアの文化施設や大学跡地を使用したアートプロジェクト「TRANS ARTS TOKYO

2014 ー神田・リビングパークー」（以下TAT）にプロジェクトチームとして参加した。今年から企画ディレクションチームに加わった中島助教は、「TATの全体のコンセプトは都市に暮らすということ。暮らしのたくさんの要素をイベントとして空き地で次々に行った。最後は住んでいる人しか味わえない週末の朝の神田を体験してもらうキャンプを企画した。アートでもあるけど、都市デザインの実験イベントでもある。アーティストやデザイナーがやりたい放題やっている場所ではなくて、そこに神田っぽいものが込められている。」

テントは神保町のお店が貸し出ししたり近くの喫茶店がコーヒーの淹れ方をレクチャーしたり、最後には神輿が登場したりしたという。

神田PJとしてはTATの一環として、**緑台ワークショップ**に参加し、**老舗ツアー**を



#### 老舗ツアー

TATのプログラムを企画した。老舗をめぐる、お話を伺う3コースを2日間実施。「一番印象に残っている」と渋谷。羽野は「外に見せるものだったから、お店の選定やガイドの練習などをもっとしたかった。」



#### 老舗ツアーのおみやげ

おみやげとしているいろいろなものを作成した。写真は読み札が老舗の説明、絵札はお店の写真のカルタ。他に、老舗の紙屋さんの紙で作った街歩き地図や、老舗ツアーのロゴ入りのどら焼きも。老舗がたくさんある神田のプレゼンテーションになっている。



#### 江戸神田百年弁当

神田の老舗の味を集めた弁当を作成、老舗ツアーの1日目の最後に提供した。メディアの取材も受けて、神田のネットワークを実感した。「こんな機会がなければできなかった。できてよかった」と老舗の店主にも喜ばれた。

企画、運営した。

縁台ワークショップは神田の街にふさわしい縁台を作成するもので、他に東京藝術大学、日本大学のチームも参加した。それぞれの作品はウェブ上で見られる。

老舗ツアーは事前に応募した参加者を神田の老舗に案内し、老舗の店主らの話を聞くもの。

「老舗ツアーで老舗に伺った時の対応が優しくて感動した。観光客慣れしていないところも協力的だった。また老舗の人とつながりができただけでなく、神田学会の繋がりがから、初めて住んでいる人から（ツアーの一環で）話を聞くことができた。」（羽野）

しかし、初めての街歩きガイドは難しかったらしく、打ち上げは反省会になってしまい飲まずに終わったという。

### 神田プロジェクトのこれから

結局「神田らしさ」は発見できたのだろうか。今年1年の発見はなにかという質問をしたところ、「神田らしい人」という部分は実感できたようだった。

「神田の人は面白いよ。神田の人というのがある。エネルギーとか思慮深さとかいろんなこと考えているというのはすごい。神田は大きくて密度があって、その密度やネットワークに圧倒された。」（中島助教）  
「江戸からの歴史を継いでいるという自負を感じる。」（渋谷）

「卒論の頃から地域が広がったから、住んでいるところだけのイメージだったのが広

がった。地域によってばらばらだけど人ベースでは神田らしさはありそう。最後は空間の神田らしさに結び付けたい。」（羽野）

PJとして来年度にむけてどのように動いていくのだろうか。

1月のミーティングで各自がこれからやりたいことを企画書として持ち寄って今後の方針を話し合ったそうだ。やりたいことは少しずつ違うが、どれも相互に関係性があり、全部一緒にできるからやろうという結論に至ったという。「大きなプラットフォームは共有されている。自由度が高いプロジェクトだから、メンバーがやりたいことをやりたいなと思っている。自由度が高い分だけ深いところまでいかないと意味がない。」（中島助教）

神田PJは当初には想像していなかった出合いやイベントに恵まれていた。その中で考えるベースをメンバー内で築き、地域との繋がりを作っていく1年だったといえるだろう。そして、神田らしい空間のあり方に迫ろうと取り組まろうとしている。

### 最後に

今回の記事の趣旨は、プロジェクトの部外者があえて率直な感想を述べ、プロジェクトがいかにあるべきか考えるきっかけにすることなので、最後にプロジェクトの今後の展開への期待を込めて筆者の目線で問題提起をしておく。

それは学生一人ひとりが、都市の課題の一つでも心の中に持っているかどうかである。都心居住を考えると言いながら、都心居住の定

義や現状の問題が曖昧のまま進んでしまっているように思う。なんとなく「都心に住む、働く」という言葉で片付け、調べ物やイベント運営をするのではなく、「都心」だと他の地域となりが違い、なにが違うべきなのか、どういう圧力や期待がそこにあるのか考えることが要るのではないか。勉強会やTATを突然降ってきたイベントとして無難に処理するのではなく、そこからなにを知見として得ようとし、得たのが重要である。もっとも、現在まさに反省も踏まえ「都心居住」の定義から議論は再開しているようだ。

詳しい人に話を聞き、地域で暮らす人々に話を聞き、イベントを運営していくということ自体は、都市デザイン研究室の他のプロジェクトを見ても決して新しくはない。もちろんそれぞれに意味はあるが、そこから新しい都市計画、都市デザインの知見に結びつけるヒントを得られなければ、個人としても研究室としてもインタビューやイベント運営の技術を磨いているだけになってしまう。自戒の念も込めると、プロジェクトはせっかく多くのエネルギーを投入するのだから、研究室に居るだけではわからない地域の固有性と普遍性を見つめながら、未来像を描く意識が不可欠だろうと思う。■

## Information

### 1月のウェブ記事

第2回 20世紀都市遺産セミナー開催！  
ようやくスタート地点の中間報告 / 三国  
まちづくり講演会で学生による中間発表！

是非ご覧下さい：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

### 2月の予定

2月3日	M2 修士論文審査
2月4日	20世紀都市遺産PJ全体MTG
2月9日～10日	M1&M2 ジュリー
2月11日～14日	三国訪問
2月16日～17日	卒業論文審査
2月24日	黒瀬助教ジュリー
2月28日	アレックス・カー シンポジウム(三国)

### \* 編集後記

高橋 舜

先日、年末年始の休みを利用して映画を見に行ってきました。スクリーンに夢中になっていると、見たことのある並木道がそこに映し出されました。思わず興奮してしまいましたが、都市を学んでいるとこういうことって少なくないのではと思います。因みにその時写っていたのは、昨年9月に研究室のみんなと訪れた上海の町並みでした。ということで、本年も都市デザイン研マガジンをどうぞよろしくお願いいたします！



▲百年弁当の試作中の様子



▲TATで自分たちが制作した縁台に座るPJメンバー同